

伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

第8回 開催報告

「持続可能な公共 ー僕らが作るパブリックー」

2026.1.18

開催報告

テーマ

持続可能な公共～僕らが作るパブリック～

開催概要

- 日時 : 2026年1月18日（日）13:00-16:00
- 開催場所 : 伊那市防災コミュニティセンター
- 参加者 : 約60人（一般参加：約50人、協議会メンバー・市職員・関係者：約10人）

プログラム

1. 土肥潤也さんによる実践・事例紹介

話題提供：土肥 潤也 氏 一般社団法人トリナス代表理事
N P O法人わかもののまち代表理事
株式会社C & Y パートナース代表取締役

2. グループワーク

～プレゼン大会前最後の対話の場。弥生の将来活用について、アイディアのブラッシュアップをはかろう～



話題提供 土肥 潤也 氏

○取組の原点・講師の体験から

<ドイツの例>

- ・ドイツでは移動型遊び場が主流
- ・商店街の広場など、公共空間を利用している。
- ・日本はまちづくりの意識の高い人＝いつも同じ人というイメージ。
ドイツでは、こどもが日々利用する中で、まちづくりについては、皆が良くしていこうという意識があたりまえ。

- 本来は公共が取り組むものを民設民営でやってみるという社会実験
⇒ 私設の公共空間・社会実験として、図書館・公民館を運営

- 「私のまち」と感じられる瞬間を増やす

○自助・共助・公助

- ・公序が減ると、共助が大切となってくるが、うまくいっていないのが現状。例えば町内会やPTA。そうになると自助、自己責任が重視される。
- ・市民参加⇒市民協働⇒市民自治
市民協働が難しくなっている自治体も多い。

○リノベーションのまちづくりの発想

- ・自分たちが住みたいまちは自分たちでつくる
- ・キーワード「当事者意識」を、こども若者を含めて持ってもらうか。
お客様から自分ごとへ
⇒民設民営の図書館を始めた。きっかけは、自分の家に本があふれていた。

○「さんかく」の由来

- ・参加・参画からきている。3人よれば文殊の知恵 3丁目3-33
- ・「まちが育て、まちが育てる」をキャッチコピーに

○プロセスは最高の広告宣伝

- ・一箱本棚オーナー制度
- ・60棚にオーナーがつき、月12万円の売り上げ
- ・所有感＝自分の場所とを感じる。
- ・人件費を稼ぐのではなく人件費をかけない。
⇒チャレンジショップ



○ポイント 属人性を分散させる
「あなたがいないと・・・」を複数つくる

- ・「属人性」＝その人がいないと回らないということ
- ・誰でもできると、つまらなくなる。

○コミュニティスペースの2階建のビジネスモデル

- ・1階部分をベースの安定収入をつくることで、経営の安定化をはかり、2階部分でプラスの収入をはかる

⇒1階 安定収入
(サブスクリプション 学習塾シェアオフィス、
コワーキングスペース)

2階 買い切り型の収入
(カフェ、ゲストハウス)

【ビジネスモデル】

- ・本棚オーナーからの収入、で利用者は負担なし

○みらジョブの取組～中高生世代が対象の職業体験事業

- ・仕事への出会い
“はたらく”の種をまく、企業と中高生をつなぐキャリアプログラム
- ・地元企業が地域に投資し、若者と未来を育てるしくみ
- ・「学び」と「働く」を地域でつなぎ、循環する未来をつくる
- ・焼津を中心にスタートし、2025年度は中高生210名・企業30社が参加
- ・みらジョブを実施することで地元で働く意識が高まる効果が！

【とりまく状況・課題】

- ・進学校の生徒＝流出、地元に残る子＝シンドイ子が多い
- ・焼津市、450人が不登校
- ・全国過去最高、通信制高校が最多。内2割が進路未決定のまま卒業する
- ・地域に若者がいても働けない環境
- ・高卒就職も一定数いる
- ・大卒より高卒を採用したい企業が多い
⇒離職率が大卒より若干高い
⇒成績順で採用を決める ← 仕組みを変えていかないと
- ・夏休みの職業体験：企業から1社12万円をもらいパンフレットを作成 ←リスク管理上、少額がたくさんというのが望ましい。

○助成金/補助金を受ける時の考え方

- ・助成金/補助金による収入はゼロ計上で事業計画をつくる。
- ・結果的には投資的な予算にお金を配分できる。
- ・勇気を持ってお金を返す（補助金を返還）も必要

○プロボノでアドバイザーが3名

- ・定期的に営業ロールプレイを実施

土肥氏との対話 ～質疑応答の中から～



Q. コンセプト、事業のアイディアは自分で考えているのか。仲間と一緒に考えているのか。

A. 自分で考えているが、失敗するものも多い。（話題提供で紹介した）寄付の福袋も、半分、失敗案件かも。当初、200セットの販売予定が、20セットしか売れなかった。事業の後半は、個別にお願いして100セットくらいになった。継続、難しいとも思う。全国の事例を自分のプロジェクトに置き換えてみたらどうなるか等考えている。試すのが早いと思うし、手数を増やすことを意識している。



土肥氏との対話 ～質疑応答の中から～



- Q. 進学校の生徒は、進学に伴い伊那から離れて県外へ出てしまうケースが多い。伊那は何もないと思っている。ある意味、“当事者意識”がないが、どうしたら良いのか。工夫は。
- A. こうした問いを、地元の高校生と一緒に考えるのが良いのではないかな。聞いてみればよい。聞いてく中にヒントがくると思う。地域の中に知り合いの大人が増えるのが大事なポイントと思う。“愛着”というのは曖昧な言葉であるが、景色や食べ物より“人”が一番ではないか。地域の大人を知らない子が多い。何かをやったという“成功体験”の積み重ねが大切。やりたいを応援してくれる大人がいるかどうか、いえる大人がいるかどうか大事。また、外に行きたいという若者を温かく送り出すことも大事と思う。

Q. みらジョブについて、不登校の生徒の問題や通信制の高校生の増加など、職業体験につなげていくことは簡単でないと思う。難しさを、どうやって乗り越えているのか。

A. 焼津市の教育委員会と密に連携。不登校も状態は様々で、年間30日で不登校というのが定義なので、月3日くらいでも不登校になってしまう。不登校の中には様々な層がある。焼津市には、不登校の子が多様な形で学べる、チャレンジ教室というものを市内に3つ設置している。チャレンジ教室に通うことができる子が、カリキュラムの中でみらジョブに参加できるように、来年度からなった。行政との連携が必要な部分。焼津市のバスを貸してもらって、企業バスツアーを行う。焼津市もやりたいと思っているが、できなかった部分。僕らも市からはバスを出してもらうのみで、企業からお金を出してもらう。こうした連携は、各地でできる可能性があると思う。

土肥氏との対話 ～質疑応答の中から～



Q. 以前、お店を改装するときに、建物への愛情がクラファンにつながった話を聞いたことがある。弥生の活用を考える会も、第1回目は初回は多くの人が集まった。潜在的に関心のある人も多いと思う。

4年後に弥生の最後の生徒が卒業をしていく。希望を叶えるために、4年間かけてクラウドファンディングをしたいと思っている。4年間の学び、希望が蓄積されていくという意味で。4年をかけて行うことについてどう考えるか、良い方法は。

A. 焼津の商店街で、おじさん達が古民家を活用したいとのことで、クラファンをしたことがある。目標金額が200万円で12万しか集まらなかった。世代の問題で、実施する人の平均年齢が60歳以上。オンライン決済よりは、振り込みや現金といったローカルファンディングのほうが良かった。途中で切り替えたら300万円集まった。

クラウドファンディングの仕組みが本当に良いのかは考えた方がよい。地元で集めるのであれば、クラファンである必要はない。手数料も2割くらいかかる。

事前のリサーチが大切。誰がどのくらい出してくれるのか。相手先のリストがあるなら、1件1件聞いても良い。そうすれば成功する。絵に描いただけでは難しく、営業的な感覚も必要。僕なら、卒業生も囲い込んで、大きなOBOG会を開くとか。いろいろな戦略を考えれば、集まるのではないかな。

土肥氏との対話 ～質疑応答の中から～



Q. 寄付の話をお聞きしたい。個人・法人からの寄付の状況について、個人・法人にとってインセンティブがあるのか。

A. 個人と法人で違うところがある。法人が寄付の場合、認定NPO、公益団体に寄付をする場合は、損金（経費）としての扱いができる。広告宣伝費として経費とすることができる。そうでない場合は、純粋な寄付であり、経費とすることができない。利益が減る。うちの場合は、法人が経費にできるような形に仕立てて、採用費や広告宣伝費で経費として落とせるようにしている。寄付する側が税制的にメリットとなるような形にすることが大切と思う。説明をするのとならないのでは、相手方の反応も変わる。そのうえで、地元の企業から寄付・協賛金を集めるというところでは、メリットよりは“お前だから出す”という意識が大きい。地元の花火大会の例、毎年1億円を集める。主催の観光協会の担当者に聞くと、例年、1社ずつお願いに回り、コミュにケーションをとっている。大切なことと思う。宣伝やホームページだけでは集まらない。企業の性質により、お金の考え方も一概にいけない部分もある。



Q. 控除になる寄付についてのお話もお聞きしたい。

A. 税制控除になる寄付。ふるさと納税をすると、税制控除になる。増えている理由である。認定NPO、公益団法人は税制控除の対象となる。大学への寄付も経費として算入できるので、寄付を集めやすい。一番いいのは自治体への寄付。企業版ふるさと納税は9割ぐらいが控除となる。伊那の企業が伊那にできないのは難しい面であるが、企業がメリットを把握していることが大事。尼崎市の例では、市が基金を創り、NPO法人を指定して寄付することができる仕組みがある。企業の協賛を集めることができるNPOにとっては大きなメリット。自治体も考え方もあるので、整理をする必要はある。

土肥氏との対話 ～質疑応答の中から～



Q. コミュニティを創るにあたり、まちづくりの意識の高い人・グループが集ってしまう。どうやって解消しているのか。“開いていく”意識は。

A. 全員に開くのは無理と思う。全ての方にとって居心地の良いものというのは難しい。かえって、だめになってしまうこともある。お金がある人だけが良いということになってしまう部分があるので、お金の寄付だけではなく、時間の寄付、様々な関わり方があることを、場を作る側が言葉で示すことが必要。クレームを言ってくれる人も、チャンスだと思う。思いのある人だから。こちらの事情も打ち明けることも必要。お金の話も必要。

Q. 四角＝公園への思いは。

A. 公民館と図書館をつくったら、次は公園かと思った。実は、公園の方を先に企画したが、土地が入手できなかったため実現していない。星という構想もあり、スナックの構想。日本の夜の公共権という本からの発想。

Q. 愛情の原点は

A. そんなに原体験が強いわけではない。中学校時、ゲーセンでパチスロをやっていた。ゲーセンにいきながら、いろいろ考えている、道草といえた。
今は、何でもかんでも生産的。何とかのために何とかしたい等、目的がないと何かができない社会となっている。
非生産的な時間の中で、自分のことを考える時間になった。余白のある環境になっていけば良いと感じている。

グループワーク



～プレゼン大会前最後の対話の場。弥生の将来活用について、
アイデアのブラッシュアップをはかろう～

「私の事業・私のアイデア」

テーマ

- ①地域商社ー多様性を真ん中においた生涯にわたる学びの場
- ②移住者向け高性能住宅賃貸事業
- ③くらしの公園
- ④若者のチーム フリートーク
- ⑤子どもからシニアまで地域の居場所

土肥氏コメント ～各グループからの発表を受けて～

①地域商社ー多様性を真ん中においた生涯にわたる学びの場

- ・ 弥生は非常に可能性のある場所
- ・ 現状の生涯学習の場は公民館＝（限られた者が企画をしている）
→誰でも教壇に立てる形としたい。
- ・ 高校生のゲームやドローンなど、また、外国人の方の料理講座なども良い。
- ・ 講座をつくり、人がきて満足度を上げることが必要。
- ・ 地域のニーズに対して、教えることができる、“ゆるい”場所がおもしろい。
- ・ 伊那小の公開授業などは全国から学びにくる。そうした方々との交流の場を地域で作ることができ、その場として弥生を使えば良いと思う。



グループワーク

②移住者向け高性能住宅賃貸事業

- ・移住者向けだけではなく、ミックスしていければ良い。
- ・ここを拠点として、伊那市の他所も取り込んでいく仕組みが良い。
- ・賃貸事業と他のアイデアの皆さんとの関係がものすごく魅力的になると思う。
- ・お他互いウィンウィンの関係が作れるような全体像になると、儲かるのではないかなと思う。



③くらしの公園

- ・“作り込んだ公園で誰もいない”ではなく、暮らし・表現がある公園にしたい。
- ・昔の入会地（いりあいち）のような、自分の庭のような公園
- ・伊那市の魅力を高める。
- ・セントラルパークのように、伊那のまちのデザインが上がるチャンス。

④若者チーム フリートーク

- ・議題は決めずに話しをした。
- ・学校をどうしたいか。体育館で運動でき、人が集まる場、若い人が戻ってくるかも。
- ・まちに若者が戻ってくる仕組みをつくりたい。
- ・こどもの頃の愛着は記憶に残る。こども向けに、高校生、大人と一緒に活動する場所、例えばフリマなど、大人の友達ができ、人とのつながりが増えれば良い。



グループワーク

⑤子どもからシニアまで地域の居場所

- ・赤ちゃんから多世代で集える場所
- ・「希望のまち弥生の丘プロジェクト」と名付けた
- ・若者支援、こどもの支援をしている団体の子どもの居場所や学びづくり
- ・放課後デイサービスの運営、社会福祉法人、フリーキッズビレッジの里親センターを持てきたい
- ・“スナック弥生”心を癒やす場所として
- ・つなぐということでは、弥生の同窓会を中心に、弥生の面影を残しつつ歴史や平和記念館など
- ・シニアの社会参加の場所として、たまり場作り



土肥氏 コメント ～各グループからの発表を受けて～

- 最後は誰がやるかにつきる
- 話し合いの場は大事であって大事でない
 - ⇒ 口を出すなら、金を出せ
- 挑戦する時に邪魔をする人が一番困る
- 挑戦する人を応援するようにするのが良いと思う
- 学校使うということは＝公共性と経済性の両立が課題
 - ⇒ 非常に困難で神業。当然、ハレーションも起きる
- 最後は、誰がやるのかということに尽きる
 - ⇒ リスクをとって、身銭を切る人を応援することが大事
- 意見があっても、口を出さないのも一つの応援



(参加者アンケートから)

(話題提供) について

- ・居場所の運営（資金・人など）について、考え方から実際の状況を聞くことができ、とても勉強になりました。
- ・全ての人にとっての“心地良い”はやはり難しいという話が印象的だった。
- ・経営、まちのつながり方の考え方が広がった。
- ・現代の視点に立った事業の進め方がとても参考になった。とにかく、同じ人が地域をけん引するこれまでの形に違和感を感じている。
- ・土肥さんのオープンで委ねていくスタンスは、これからのまちづくりの参考にしていきたい。
- ・事業は何のために行うのか？もうけるためにではなく、楽しく明るくといった視点に立つと、もう少し楽に事業を進められるかもしれない。
- ・子どもがどう考えるか、大人目線ではなく、子どもが発言する場は必要。
- ・土肥さんの講演の裏には、様々な経験があることを感じた。良く考えられている。
- ・感動しました。すごいです。
- ・まちづくり会社のマネタイズどうするか。非常に興味深く、知りたかったお話が聞けて、とてもおもしろかったです。
- ・不登校・ひきこもり支援について、行政と連携して活動されているとのお話、大変素晴らしいと感じました。
- ・パチスロのお話、特に刺さりました。余白は大事だなと。
- ・とても面白く拝聴しました。お若いのに、いろいろなアイディアで金銭面でも自走できている事業ができていることを本当にすごいと思ったし、それが中学のときのゲーセンのパチスロというのが、興味深かったです。自分の子どももムダな時間が大事なんだろうなと思いました。自分が地域でできることを、これから考えていこうと思います。
- ・自己表現できる社会の必要性に感銘した。
- ・すごく勉強になりました。市民が創るっていいですね。

(参加者アンケートから)

(グループワーク) について

- ・時間が足りなかった。他のグループもまじってみたかった。
- ・初参加のため、詳しく話には参加できませんでしたが、皆さんの様々な話、想いも知れて勉強になりました。
- ・年齢のはなれた人たちが、若者のために何を考えているか知れた。
- ・若手チームに参加したが、大人が作り過ぎないことが大切と感じた。人を引っ張る求心力をどう作っていくのかを考えていきたい。
- ・若者の話、面白かったです。
- ・前向きなディスカッションありがとうございました。
- ・すべてのアイデアが魅力的で、これからアイデアをどうまとめるかは大事ですが、とてもわくわくした時間でした。
- ・生活の中にある庭のような公園にしたいという、ワクワクする決意表明になりました。プレゼンテーションが楽しみです。

(その他のご意見) について

- ・貴重な機会でした。ありがとうございました。
- ・土肥さんの持続させていくための様々な施策がとても参考になりました。
- ・とても良いタイミングに立ち会えてうれしいです。仕事として、ボランティアでも、関わっていけたらうれしいです。
- ・大変勉強になりました。



伊那新校、上伊那総合技術新校の開校を契機に、
多様な皆さんとこれからの伊那市のまちを共に考えて創っていきたいという想いで「新しいまちづくり」が始まりました。

伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

誰かがやってくれるまちづくりに意見する、ではなく、自分がつくる、取り組む人と共にある。

そんな、つながり、対話し、実現する場をどうしたらできるだろうか。

これからは、想いのある皆さんと共に考え、試行錯誤しながら共創の場をつくっていければと思います。

いつでも、思い立った時に、ふらりと参加でき、まちのこと暮らしのことを気軽に話せる場。

もっと知りたい、もっとやりたい、やってみようが生まれる場。

そんな新しくゆるいコミュニティが生まれる場。

そんな、いつでもそこにある場に育てていきましょう。